巻頭言

杏林大学医学部消化器内科学教室

森 秀明

2020年は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で社会生活や経済活動が一変した1年間であった。各国でロックダウンが行われ、自粛要請によりさまざまな社会活動や経済活動が停滞した。わが国においても東京五輪(オリンピック)・パラリンピックが延期になった。また本学においては医学部創立50周年記念祝賀会が延期を余儀なくされた。

教育の場でも小学校から大学に至るまで臨時休校となり、本学でも教室での授業を中止し、ウェブでの授業に振り換えられた。また春先には各領域の学術集会や研究会の中止が相次いだ。秋から年末にかけてウェブでの開催が行われるようになってきた。めまぐるしく社会情勢が変化したこの1年の間にZoomやGoogle Chrome、Microsoft Teamsなどのツールが教育や医療の現場でも活用されるようになり、これらを用いた講義や学術集会、研究会などが開催され、改めてインターネット社会であることを実感した1年であった。

学術集会や研究会がウェブで開催されることにより、日常の業務に変化がみられた。会に出席するための移動時間がなくなり、開始直前まで学内で仕事をするができるようになった。このように時間を有効に使うことができるようになったことは良い点であるが、一方、学術集会や研究会の休憩時間などに他の医療機関の先生方に直接お会いしてディスカッションをしたり、情報交換をすることができなくなってしまった。一方、私が専門にしている超音波医学を例に例えると、従来は各地方会で開催される学術集会の参加者はその地域の医療関係者が大多数であったが、ウェブ開催により、全国から参加者が集まり、過去に開催された学術集会と比べて2倍近くの人数の参加があった会も報告されている。学術集会、研究会の開催方式の変革に伴い、今後もいろいろな問題点が指摘されてくると思われるが、良い面を伸ばしていく必要があると思われる。

わが国では年末になり新型コロナウイルス感染症の第3波の感染が広がり、「go to トラベル」が停止され、恒例の忘年会などの行事も中止になり、静かな年末年始を迎えた。一方、年末から年始にかけて感染確認が最多を更新し、医療現場では逼迫した状態が続いている。そのような折、海外では新型コロナウイルスに対するワクチン接種が始まった。今後、わが国においてワクチンの接種が始まってもしばらくは新型コロナウイルス感染症の影響が続く可能性があるが、会員の皆様が困難な時期を乗り越えて2021年が飛躍の年になることを祈念したい。

杏林医学会雑誌の編集委員会では毎年、様々な新しい企画を計画しており、読者の皆様に有用な情報をお伝えしていくことを心がけている。医学のさらなる進歩のためにも、ぜひ会員の先生方におかれましては引き続き奮って雑誌へ投稿をお願いする次第である。